



日々雑感 (コロナ禍にて)

COVID-19パンデミックのなか、改めてサイエンスのパワーを感じている。新型コロナウイルスのゲノム塩基配列が明らかになってから僅か1年ほどでmRNA ワクチンが実用化されたが、この華々しい成功の陰にはハンガリーからアメリカに移住した一人の女性研究者 (Dr. Karikó) の人知れぬ努力があった。mRNA ワクチンのアイデアは当初は不可能と思われ、Dr. Karikóは長い間グラントを獲得できず、とても苦しい思いをしたそうだ。ところが、その発見の価値を少数の研究者やBioNTechの創設者に見出されて、今日のコロナウイルスワクチン開発の多大な貢献につながるのである。当時の大学のチェアマンに追い出されそうになってもあきらめず努力した研究者と、当初からRNAワクチンの優位性を信じて見捨てなかった同僚や企業がいたおかげとのこと。ワクチン開発の裏には、このような物語があることを知り、信念をもって粘り強く地道に研究を進めることの大切さを改めて認識した。昨年12月にはご自身もワクチン接種を行い、居合わせた医師や看護師から拍手喝采を浴びたとのこと。いくつかのメディアでDr. Karikóのワクチン開発に関するサイドストーリーがわかりやすく解説されているので是非ご一読を。

Dr. Karikóへの助成金は、何故長い間採択されなかったのだろうか。恐らく第一線の研究者が複数名参加して審査が行われるのであろうから、その道の専門家でさえ研究が

その後どのように発展するか、また、どのように役に立つのかは、本当に予測が難しいものである。オートファジーやPD-1も、発見当初は今日のように科学・医学にインパクトを与えるとは、全く予想されなかったという話である。

これらのことは、現在行われている助成金審査が、潜在的な問題を抱えていることにならないだろうか。最近ニュージーランドやスイスでは、なんと抽選による一部の助成金の配布が試みられているという [もちろん何か書いてあれば何でもよいというわけではなく、基準を満たした申請書だけが候補となり、また、誰が見てもexcellentな申請は問題なく通る (対象外) ようである]。我々が日々とても苦勞している研究費が抽選で決まってしまうとは、とんでもないアイデアと最初は思っていた。しかしながら、研究の潜在的な価値は大部分の人には計り知れず、ブレイクスルーはどこから来るか全くわからない、ということ踏まえると、なかなか優れたアイデアなのかもしれない。また、この方法には、一部の分野や研究者に集中しがちな助成金について偏りを減らし多様性を向上させることや、審査員の負担も減らすことができることなど、他にも様々な利点があるらしい。

無謀なように見えるが助成金の一部を抽選の枠に入れ幅広く分配することで、長期的にみるといろいろと解消される課題があるのではないだろうか。Dr. Karikóの例のように、発見した研究者のオリジナリティーが発揮されていればいるほど、発見当初は本人しか価値や面白みが分からない (世間には受け入れてもらえない) 研究は世界中に相当埋もれているのではないだろうか……といろいろ妄想しながら、デスクワークに戻る現実である。

(SABOさん)